

■ 札幌ふるさとの樹木 ■

その16：ハルニレ（春楡）・ニレ科

春に花をつけるニレの意。

ニレとは皮をはぐとヌルヌルしていることから。ヌル→ヌレ、ニレになったものといわれている。

別名：エルム（英名）、アカダモ。北大のシンボル。日本各地の適湿かやや湿った肥沃な土地に生育する。

花期は、4月。花色は赤紫。花序は穂状。花は葉の展開に先立って枝先に咲く。葉は、互生。葉はやや厚くてざらつき、縁は重鋸歯。裏面葉脈には毛が多く、葉の形は左右非対称。材は固く、器具、楽器などに用いる。



種子



左右非対象

〈神話を生む美しい巨木〉

1. 北欧の神話によると天地を創造した首神（オーディン）がニレの木に魂を与え、エンプラと名づけ、人類最初の女性とした。以後、神は遠慮してこの木には雷を落とさないという伝説を生んだ。
2. ユーカラに語り伝えられるニレは女神である。ハルニレ姫は天上の神々が見とれるほど美しかった。ついに雷神が足を滑らせハルニレ姫のうえに落ちてしまう。姫は身ごもり、男の子アイラックを産んだ。アイラックは神のもとで成長し人間界に帰り、悪魔から人間を守った。従ってハルニレは、神様の位では最高の「火の神」として敬われた。